

であり、中学卒業後の早い段階から、実習等の実践的な学びを通し、大学と同程度以上の知識・技術を身に付け、大学より2年早く社会に出られるカリキュラムとなっている。座談会開催時点で、日本国内に、国立高専（51校55キャンパス）、公立高専（3校、2028年4月に1校開校）、私立高専（4校）がある。最近では、海外高専（5校、2025年9月に1校開校）ができてきており、世界的にも注目され始めているプログラムである（図1）。

中学卒業後に入学する学生が多数を占めており、中学校卒業生のうち約1%が高専に入学している。これに加え、少数ながら、普通高校卒業後、4年次に編入している学生もいる（若干名／年／校）。主な卒業後の進路は、就職、大学3年次編入学、高専専攻科進学の3つとなっており、最も多いのが就職（5-7割）だが、最近では大学や高専専攻科に進学する学生も増えてきている（約4割程度）。

2.2 高専での教育について

教育カリキュラムについては、通常、高校では3年間一般科目を学び、大学入学後に専門科目が徐々に増えていくのに対して、高専では1年生か

ら専門科目があり、学年が上がるに連れその割合が徐々に増えていく。1クラス40人という少人数制で、教授・准教授といった教育スタッフからきめ細やかな指導を得られるのが特徴である。

専門科目は各専門学科教員による授業、演習、実験実習であり、学科ごとに異なる科目が提供される。各科目、研究分野の近い教員が担当する。1教員当たり5コマ程度／半期の授業を担当しているが、5種類の授業を担当するため、着任当初は授業の準備が忙しくなる。一方で、授業資料を一度作り上げると、徐々に負担は軽くなっていく傾向がある。

一般科目は一般科目教員による授業となっており、概ね全学科で共通の科目を行う。1教員当たり5-6コマ／半期であるが、1-2種類の授業を複数の学科で行う形となる。そのため、専門科目教員に比べ、授業準備の負担は少ないが、試験の際には、200人程度の採点を行うため忙しくなる傾向がある。

呉高専の場合、物理については、1-3年前期は高校物理を学び、3年後期には微分積分を用いた質点力学、剛体力学を学ぶ。数学については、

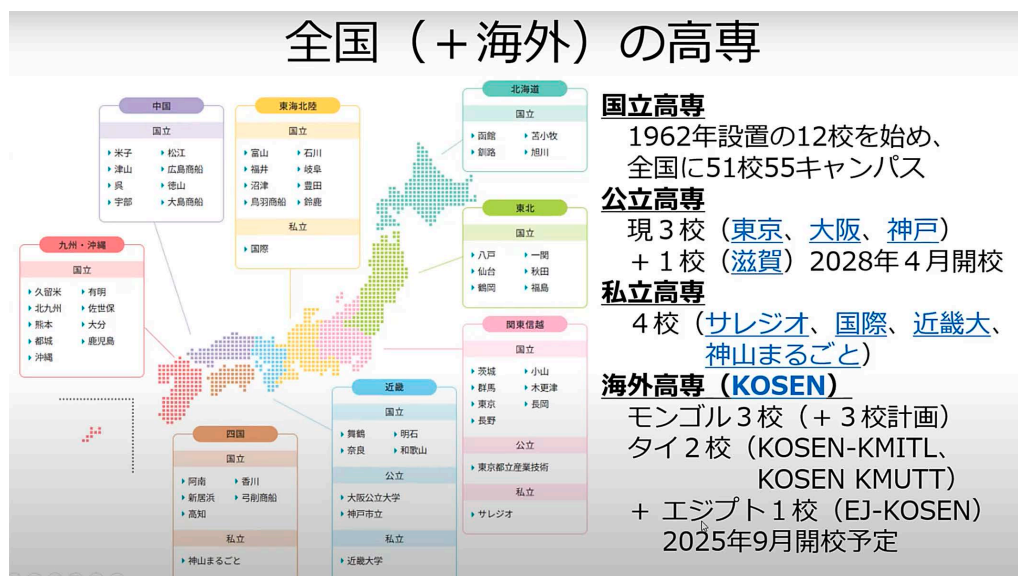


図1 全国（+海外）の高専（小林さん講演資料より）。



図2 国立高専の科研費獲得金額の推移（高橋さん講演資料より，出典：独立法人 国立高等専門学校機構概要（令和6年度）19 ページ）。

こと，論文が少なくとも採用される場合があること，論文が少なくとも教授になれる場合があること，所在地が都市圏でないことなどがあげられた。

4. 高専での学生指導について（一関高専・谷川享行さん）

4.1 学生指導について

クラス担任については，一関高専の場合，全教員の1/3強が正担任を担当している。着任1年目に正担任になることはなく，着任2年目からの担当となる。定例業務としては，毎週，ホームルーム（1コマ），ショートホームルーム（5-10分程度）を行うこと，毎日，出席確認，学級日誌の確認を行うこと，年2回，保護者面談を行うことなどがあげられる。これに加えて，体育祭や文化祭の時には，その監督業務があるが，通常，教員は学生が主体的に取り組むのを見守るという位置づけである。高学年の担任（専門教員が担当）は，

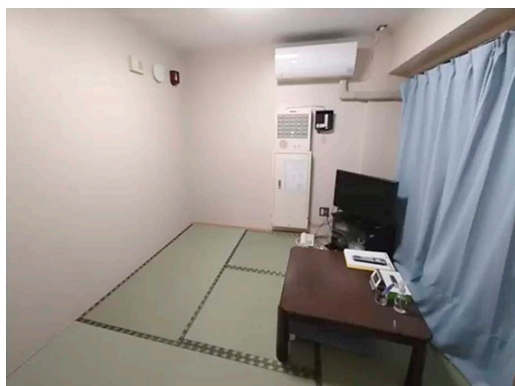


図3 宿直室（谷川さん講演資料より）。

進路指導も行う。

部活動については，一関高専の場合，28の部活を82人の顧問が担当している。代表顧問は1つの部活を担当し，それ以外は複数の部活の顧問を併任する。最も大事な業務は安全管理であり，怪我などがあった場合に迅速な対応を行う。具体的には，練習の際には，顧問が誰かしら学校にいるよ

間に対しては「テーマ選びが変わる。研究時間が大事になるテーマは他の研究者に任せ、異なる研究テーマに取り組むようになった。また、ポストドクの時は、成果や任期のプレッシャーがあり、研究をあるところで区切りにして論文化することもあったが、今は最後までやり切って論文化することができる」との回答があった。

6. おわりに

これまで高専教員というキャリアの存在は認識していたものの、具体的な業務や研究環境を知る機会は限られており、十分に理解できていなかった。今回、高専の概要から具体的な業務内容、研究環境に至るまで、幅広く生の声を伺うことができ、今後のキャリアを考えるうえで大きな参考となった。印象的だったのは、講演者の皆様が高専での教育や業務について、とても前向きに、楽しそうに語っていた点である。これまで、授業や学務は義務的な側面が強く、負担と感ずる場合も少なくないのではないかと想像していたが、実際には教育や学生指導に充実感を見出しながら積極的に取り組まれている姿を伺い、その印象が大きく変わった。

謝 辞

本稿の執筆機会をくださった日本天文学会キャリア支援委員会の高梨直紘さん、川勝望さん、座談会の講演者である小林正和さん、高橋芳太さん、谷川享行さんに感謝申し上げます。

The Report on the Online Panel Discussion, “Careers in KOSEN—Let’s Learn About the Work of KOSEN Faculties!”

Masato SATO

Graduate School of Arts & Sciences, The University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro, Tokyo 153-8902, Japan

Abstract: The ASJ Career Support Committee organized an online panel discussion “Careers in KOSEN—Let’s Learn About the Work of KOSEN Faculties!”, on May 15, 2025. In this decade, the number of astronomers in National Institutes of Technology (KOSEN) has been increasing, and a KOSEN faculty position has become one of the career options for early-career astronomers. In this event, invited three KOSEN faculties working on astronomy gave a talk on the work and career in KOSEN. In this article, we report on the content of the event. To ensure the report reflects the perspective of those directly involved, we asked M. Sato from the University of Tokyo, who joined the round-table, to write this article.